

エクスデス先生（仮）

Rakusai

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ふと思いついた物を文章にしてみた超絶短文チラシの裏。目が覚めたらエクスデス先生でした。

目

次

エクスデス先生 1	
エクスデス先生 2	
エクスデス先生 3	
エクスデス先生 4	
エクスデス先生 5	
エクスデス先生 6	
エクスデス先生 7	
エクスデス先生 8	
エクスデス先生 9	
エクスデス先生 10	
	32
	28
	24
	21
	18
	14
	11
	7
	4
	1

# エクスデス先生1

気が付いたら、エクスデス先生だつた。

いや、なんのこつちやと言う話だが、布団に倒れこんで目が覚めたらそうだつたとしか言いようがない。

筋骨隆々とした四肢を青味のかかつた甲冑に包み、身の丈は2mを軽く超え、片手には死神の剣と思われる剣も携えていた。

なお、職業は暗黒魔道師の模様。

貴様のような魔法使いがいるかと言いたいが、同じFFシリーズのゴルベーザ兄さんも職業魔道師である。

意外と古くから存在しているようである、筋肉系魔法使い。話がそれた。ともかく、エクスデス先生なのである。

森の中でふと意識が覚醒し、色々と混乱した後にとりあえず水場探そうとウロウロ、見つけた小さな泉に姿が映つて……。

俺とはいつたい、……う（ジジジ）。

ちなみに甲冑は脱げた。意外と簡単にすっぽつ。

下から出てきた顔は、ディシディアのコスチュームで出てきた悪魔風のアレ。もしくはネオ・エクスデスの先の人。水鏡なので曖昧だが。

ちなみにこの甲冑、気合を入れたら魔力か何かを材料にして再生成が出来るようだ。

メイド・イン・エクスデス。……木製？

とまあ、先ほどからこんなことを考えつつ泉のほとりでうんうんと唸つている。

フルフェイスの兜までかぶった全身甲冑の大男が。  
我ながらシユールだ。

ところで延々数時間、少なくとも太陽の角度が目に見えて変わる程度は座り込んでいるのだが、腹は減らないし喉も渴かない。

そもそも、この体でなにを食べればいいのかが分からないと、その内に飢え死にか食中毒である。

エクスデス先生は樹木なので、とりあえず土と水と太陽光があれば生きていけるような気はするのだが……。

水は飲もうと思うのなら飲めるといった具合で、別に必須でもないかな？ と首をかしげた。

ひよつとしたら食事そのものが不要だつたりするんだろうか、この肉体。

人間が、人間？ が生きていくのには衣食住が必要だと言うが、衣もとい鎧は自分で作れるし、食は要るかどうかがわからない。

最後の住居は、何か不要な気がしてならない。元が樹木だし。むしろ俺が建材。将来の夢は立派な家の大黒柱（物理）です。

……。

でも、オリジナルのエクスデス先生は城を建ててたよな。バリア完備のすごいヤツ。

これはつまり、家を建てるなら城を目指せと言うことか。さすがに常時ビクンビクン脈打つて内壁は趣味が合わないけど。

まあ、住居についても後でいいだろう。

何となく眠る必要も無さそうだし、身の安全？ ハハツ、見ろよこの上腕二等筋を。真空波とか打てるんだぜ！

実際打てた。ひよつとした大木が幹からべきつと折れた。

……魔道師ってなんだっけ？

さておき、結局やるべきことが特になことが発覚してしまった。なので、ひよつと魔法の練習でもしてみようと思う。

自衛手段としては真空波と死神の剣があれば問題はない気がするのだが、暗黒魔道師としてのアイデンティティが魔法を使えと叫んでいた。

ジョブエンジしてから1日たつてないけど。

あれやこれやと試行錯誤して、魔力かなーこれと思ったものをこねくり回し、うろ覚えのFFTの詠唱を試してみたりする。

結果、目の前に出現する一抱えほどの氷の塊。

ズドバーンと派手な音を立てて泉に落下して、水鏡として機能して

いた森の貴重な水源をカチンコチンに固めてしまつた。

ブリザドである。

何か勢い余つて岸辺の雑草まで凍らせているがブリザドである。  
すごいね暗黒魔道師。

……。

そしてファイアとサンダーを避けた俺氏、ファインプレー。火事の元つてレベルじやねーぞ。

何にせよ魔法である。黒魔法である。

せつかくのでもう一回、今度はこころもち魔力っぽい物を抑え目で使つてみると、小さな氷が出てきてカチコンと小さく地面を凍らせた。

どうやら威力は調節できるらしい。ちょっと安心。  
ともあれこれで堂々と胸を張つて暗黒魔道師を名乗れると言うものだ。思わず笑いがこみ上げてくる。

「ファファアファアファ……」

あつ、笑い声これ固定なんですね先生。

つづかない？

## エクスデス先生2

どうも、今日も今日とて森の中、泉のほとりでエクスデス先生をしています。

腹が減らない喉も渴かない睡眠すらも必要ない。ついでに言うと基本不死身。究極生命体エクスデスの誕生だアアツ！

つまりね、やることが無いんです。

食糧を調達する必要も、安全確保のために縄張りを作る必要も、自衛のために自らを鍛える必要もないから。

少し前に襲撃してきたクマさんなんて、真空波の余波だけで空を舞いました。噛み付かれても問題はなかつたと思います。多分。

フルプレートだからね。木製疑惑あるけど。

今のところはモンスター的なアレコレも見かけていないので、この泉の前でボケーツとしている分には身の危険は感じません。

突如として野生の光の四戦士（暁の戦士でも可）が出てこない限りは大丈夫だと思います。ええ。

もしくは亀。あるいは賢者。具体的にはギードさん。

生まれたてのエクスデス先生を、何か邪悪っぽいという理由で500年も封印しやがった外道亀畜生です。

さらにさらに、何とか封印を解いた先生に対して暁の四戦士をプロデュースしてけしかけ再封印する徹底ぶり。

なおかつもガラフが隕石に乗つて第一世界にやつてきたのも、ギードの差し金な模様。

全エクスデス種の天敵（確信）。

そりやあカメエエエッ！ とか叫びますよ、先生も。

もつとも、後々にエクスデス先生がやらかしたことを考えると割りと残当な模様。

と、そんな益体も無いことを考えながら、エクスデス先生になつてから数度目の夜明けを見つめています。

いやね、その気になれば光合成だけしながら延々と百年もこのまま

でいらっしゃなんですよ。

なにしろ元が植物だけに時間の感覚が人間とは段違いのようで、ぼんやり空を眺めてるだけで一日が終わったりもして。

時々思い出したように魔法の練習なんかをしているので今はまだ大丈夫だと思うけど、何かしら目的見つけないとボケそうです。

そうそう魔法と言えば先程言つたクマさん相手にケアルの発動に成功しました。ホーリー使つてただけあつて、先生つたら白魔法もいける模様。

試してはいないけど、時魔法も行けるでしょう。デジヨンで一れーさせてたし。デイシデイア的なテレポ移動は、ちょっと憧れる。と、木立の間に鹿を発見。……水を飲んでいるところ悪いけれど、せつかくなので魔法の実験台になつてもらうことにしてよう。

### 「スロウ」

魔力をひねり出して魔法の名前を告げると、鹿の周囲の空間がぐにやーと歪んで見えるようになった。

慌てた鹿が跳んで逃げ出しが、その動きはスローモーションのように遅滞している。滞空時間が明らかに長いのだ。

そのまま森の奥に消えるのを見送つてもよかつたが、スロウ状態で肉食獣に出会われたら寝覚めが悪い。……寝ないけど。  
と、言うことで。

### 「ディスペル」

イメージとともに魔力を放出すると、稻妻のような光線が鹿に向かって飛びパチンとはじけて消えた。

スロウを打ち消された鹿は、元来の俊敏を取り戻し木立の奥へと去つていった。

俺はその結果に満足してうんうんとうなずいてみせる。

これからも、動物たちを見かけたら何かしら魔法を試してみることにしよう。

崇められました。

なんでやねん。

いや、傷ついた動物にケアルかけたり、補助魔法の実験に付き合つてもらつたりしたからなんだろうけど。

ハイストかけた狼？ 野犬？ のスピードはすごかつたです。はい。

で、気がついたら、俺の周りがアニマルパラダイス。

最近は肉食獣と草食獣が仲良く水を飲みに来ます。野生の本能はどうした、お前ら。

そして目の前にはそんな彼らが持つてくる、獲物の分け前とか木の実とかが積み重なっています。

元々動物たちの憩いの場だつたのだろう森の泉は、今ではちよつとした祭壇チックに。

とりあえずレイズかけても蘇生しない動物たちは、腐らせるのもしおびないのでファイアで焼いていただいています。

ここで美味しくないなーとか、調味料が欲しいなーと思わないのは俺がエクスデス先生だからなのだろう。きっと。

暫定異世界での初食事が動物からの貢物つて、どうなんだろうね？

「ファファ……」

思わず笑い声をもらしたら、近くにいたリストっぽい動物がめちゃくちやビクウツとしてました。

迫力あるもんな。先生の笑い声。

ごめんよ。

つづいた。

## エクスデス先生3

我輩はエクスデスである。名前は、名前……先生の名付け親つて誰なんだろうね？自称？

はい、どうも。今日も相変わらずエクスデスやつてます。

アニマルパラダイスのご神体と化してから、ざつと一ヶ月ちょうどいつたところでしようか。

飲まず食わずつてこともないんですが、あからさまに健康に悪そうな野外生活を続けていても大事はありません。

雨にも降られ、風にも吹かれ、季節の過酷さにこそさらされてませんけど、野ざらしの私は元気です。

すごいね、エクスデスボディ。

ここしばらくは、変わりばえもせず魔法を試したり、動物を愛でたり、森の木々に癒されたりしています。

腰を下ろしてから微動だにしていないもので、魔法使うときに動かす上半身は置いても、そろそろ下半身に根が生えていか心配です。

まあ根付いたら根付いたで仕方ないので、このまま御神木と化すのも悪くは無いと思つてます。

割りと本気でそんなこと考えちやうあたり、俺の思考は人間だった頃とは随分とズレてきてているのでしょう。

何か以前からこんな性格してたような予感もヒツシヒシとしますけど！

しかし、そうしてあらためて己の姿を省みると、ずいぶんと自然に埋没し始めていることが分かる。

上半身の胸甲には土や細かな草の欠片などの堆積物が張り付いているし、下半身なんてツタ系の草が巻き付きはじめているほどだ。あ、ちなみに一番自然の侵食が激しいのは、初日に投げ出してそのままになつていた死神の剣です。

もう完全に雑草の海に沈んで、パツと見て所在地が分からねえや。

ファファアファ。

鎬びてたらゴメンな。

でも、即死付与のお前さんの使いどころが無かつたんじゃ。

そんなある日のこと、俺から見て背中側の低木をかき分けて一つの足音が聞こえてきた。

足音の主は力チャカチャと金属質な音を鳴らしながら、二歩、三歩と俺の、と言うよりは泉のほうへと近付いて、ドサリと地面に倒れる。実際に見事な、絵に書いたような行き倒れをやつてのけたのは、金属製の軽鎧を身につけた赤毛の剣士だつた。

行き倒れは、少しばかり薄汚れたなりをしているものの端整な顔立ちをした青年だ。

彼を剣士と呼んだのは、倒れると同時に投げ出された杖代わりにしてきたのだろう長剣があつたから。

実際は、剣の柄頭に刻まれた紋章や軍服に通じるような軽鎧の意匠から騎士と呼ぶのが適切かもしれない。

まあ直接聞いてみないことには正確なところはわからないので、今は置こう。

問題は、彼をどうするかだ。

これが普通の動物ならいつも通りのケアルして終わりなのだが、なにしろ相手は人間だ。

今は先生やつてるが俺も元は人間なので見捨てるに忍びない感情はあるが、同時に助けてもいいものかという考えも湧いてくる。

感情とか倫理道徳とか社会とか宗教とか、色々と面倒くさいからね、人間つて。

助けるか。

そう決めたのは、人間も動物の一種だしいつも通りでええやろ、とそんな考えからだ。

いやまあ、ちょうどやつてきていた狼が、赤毛の彼に鼻を寄せてス

ピスピさせていたからってのもちよつとあるけどね？

見た目はほほえましいが、ここ一ヶ月余り動物たちを見続けてきた俺には分かる。

あのスピスピは、「大丈夫？」じゃなくて「食つていい？」だと。

青年にレイズかけたときによつと残念そうに去つていつた狼一家には悪いが、目の前で人間がモグモグされるのは勘弁だった。

かくして、とりあえずの命の危機を脱した青年を、俺は右手でもつて持ち上げ自分に寄りかかるようにした。

後はケアルでもかけて、目覚めるまで放置しておけばいだろう。

ケアル、そうケアルだ。

ケアルラでもケアルガでも、ましてや影の薄いケアルダでもなくただのケアル。

多分使おうと思えば上位の回復魔法も十分に行使可能なのだけど、今のところはケアル一本で間に合つてたりする。

エクスデス先生由来の大魔力も関係しているのかもしれないが、重症からの急速回復にレイズを使うくらいでケアルラ以上に出番がない。

……過剰回復で鼻血出ちやうかどうかが怖くて、試していないとも言う。

一応、全快状態の自分に回復魔法をかけてみたところ、無傷の状態で回復させても特に悪影響は無いようには思える。

ただし、治験の対象がエクスデスボディなので、ぶっちゃけ参考になるかどうかは微妙。

悪い予感が当たつて過剰回復で体がパーンしたりしても、あつさり復元できそななんだもの。

「ケアル」

と言ふことで、行き倒れさんはケアルかけといた。完治した。顔についてた細かい傷も、もうなくなつた！

ところで攻撃魔法主体の黒魔法を使った記憶がここしばらくありませんが、俺は暗黒魔道師です。

どの魔法が得意か聞かれたら真っ先に回復補助系と答えますが、俺

のジョブは暗黒魔道師です。  
あと真空波とか打てます。

……。

これさ、パラディンじやね?

ただし、ドラクエの方の。

つづこう。

## エクスデス先生4

騎士アルトは、王国近衛騎士団に所属する騎士である。

近衛の中では最も若く、その特徴的な赤毛は見る者の目を引きつけ、眞面目で実直な性格は多くの騎士、王族の歓心を買っていた。

騎士団の次代を担う者として剣腕を鍛えてきたアルト。そんな彼を初陣で待ち受けていたものは、亡国と言うどうしようもない出来事だつた。

宣戦布告もないまま突如として侵攻を開始した北の帝国は、またたく間に王国の領土を席巻。

北方の守護である大貴族の裏切りもあつて、開戦よりわずか半月で王都は陥落し国王はじめ王族はそのほとんどが断頭台の露と消えた。近衛騎士団も王都の攻防戦で磨り潰され、最後に確認された生き残りはわずか一個小隊にも満たない数だった。

その数少ない生き残りも、唯一生き残った主君の血筋……王女を逃がすために潰えて消えた。

迫り来る帝国の追つ手から殿軍となつて王女が乗る馬車を逃がしきつたその後に、近衛騎士団は帝国に対する最後の反撃を慣行。

アルトは、アルトだけは、ただ年若いという理由で、その攻撃に参加することを許されなかつた。

逃げろと。

そう命じられて、森の中に投げ込まれた。

自分も戦えると、一緒に死なせてくれと、アルトは叫ぶことが出来なかつた。

王女を頼むと、生き延びて自分たちの戦いを報告しようと、そう言われてしまつたからだつた。

軍馬のいななきを背に受けて、アルトは森の中を駆け抜けた。

振り向かなくとも分かつていて、帝国軍の本隊、今まで戦つていた先遣隊とは比べ物にならない数が迫つていると。

そのまま一昼夜、ただくたに駆け抜けたアルトは、自分が酷く疲弊していることに今さらながら気がついた。

傷口が傷む。殿軍として戦う中で負った大小の傷が熱を持つていた。

体が重い。王都陥落以来、まともな休息をとつてはいない。

空腹が、渴きが、眠気が、意識を閉ざそうと襲い掛かってくる。

森の中は、獣の気配が多い。

三日目には、どうにかして木のうろに身を隠して休むことが出来た。手持ちのわずかな食糧は、その時点で全て消費した。

四日目。水場を探してさまよつた。生の木の実をかじり草の露をすりながら、森の中を歩く。

五日目。傷口が赤く腫れ、体全体が熱を持っていることに気がついた。

六日目。剣を杖にしなければ歩くこともできなくなつた。目は霞み、眼前の景色すら判然としない。

そして七日目。

「うつ……」

軽い頭痛と眩暈を感じながら、アルトは意識を覚醒させた。

ようやく見つけた水場を目の前にして、ついに限界を迎えて倒れしたことまでは覚えている。

ぼんやりとした頭で周囲を見回し、記憶にある通りの泉を見つけると手を伸ばして清水を口に運んだ。

甘露か。

久々に口にしたまともな飲み水は、自然そう思つてしまふほどアルトの五体に染み渡つた。

不思議と体は軽く、傍らには愛剣もある。

これならば、森を抜けられるかも知れない。

アルトがそんなことを考えた、その次の瞬間。

『目が覚めたか』

厳肅な雰囲気を伴いながら、声が響いた。

それは巨大な人型をしていた。

今は泉のほとりに座しているが、立ち上がればアルトの背丈をゆうに超えるだろう巨体。

半ば自然に埋没して、草と土にまみれた甲冑騎士。巨大な甲冑も、その内にあるだろう巨躯の肉体も、探そうと思えば人の内にあるは存在するかもしない。

しかし、目の前の”それ”は明らかに人とは違う、異質な、常ならぬ存在だとアルトは思う。

まるで巨木のようだ。

アルトの抱いたその感想は、偶然か否か”それ”の本質をきわめて正確に見抜いていた。

「あなたは、いつたい何者なのだ？」

投げかけた問いに、巨大な騎士は何事かを考えるような素振りを見せ、またフルフェイスの兜をアルトの方へと向ける。

そして口を、そう兜の内にあつてうかがう事はできないが、おそらくは口を開いた。

『我が名はエクスデス』と。

つづく

## エクスデス先生5

『我が名はエクスデス』

どうも目を覚ました赤毛の青年に聞かれて、思わずそんな答えを返してしまった俺です。エクスデス先生やつてます。

ちなみに言語関係はフリー・パスで翻訳されている模様。少なくとも、赤毛の彼は日本語使ってないので。口の動き的に。

「エクスデス……殿。自分は、アルト。王国近衛騎士団の騎士、でした」

何かを悔いるようにそう言つた赤毛くん、もといアルトくんは、ポツリ。ポツリと懺悔するように事情を話してくれました。

突如として侵攻する帝国、崩壊する王国、逃げ延びた王女と殿軍となつて壊滅した近衛騎士団、裏切り者の貴族。

なるほどFF2か！

すみません、せめて心の中で茶化さないと重いんです。話の内容が。

まあ、概要的にFF2でも間違つて這いないとと思う。さすがに皇帝が黄泉の国の力を使つてるかどうかまでは分からぬけれど。

「そして自分はこの森に逃げ込み、エクスデス殿、おそらくは貴方に助けられたのでしよう」

アルトくんは、話の最後をそう言つて締めた。聞いてみたら、自分の体についていた傷がなくなつていたことからの予想らしい。

身の上を説明しながら、自分でも状況を整理していたんだそうな。聰明で責任感が強く、唯一生き残りでついでに美形。アルトくんの主人公力（しゅじんこうちから）の高さに、俺ビックリです。

で、分かりきつたことだつたけど「行くのか？」と聞いたら、「はい」と重々しい返事が返つてきました。

「分かつてはいます。自分一人では、帝国の包囲網を抜けることすらかなわないだろうと」

アルトくん個人に対するものまでやつてるかは分からぬけれど、帝国による敗残兵狩りが行われているのは想像に難くない。

見つかろうものなら、きさまら反乱軍だなってやつである。

一人のほうが身軽と言う点は利点にも見えるが、食料やら水の調達に目的地までのルート探しも全部一人でやる必要があるのだ。アレコレやつてる内に、多分警戒網にひつかかる。

ふむん。……。

「命を救つていただいたことに感謝を、ですが自分は」

「待て」

今にも永訣の言葉を告げそうなアルトくんの言葉をさえぎつて、俺は実に久々にその場から立ち上がった。

それによつて下半身に巻きついていたつる草がブチブチとちぎれ、甲冑に積もつていた土や草がボロボロと零れ落ちる。

二度三度、肩や腕を回してみるが特に問題はない。

「エクスデス、殿？」

「私も行こう」

随分と小さくなつた、もとい立ち上がつたら視点が上がって見下ろす形になつたアルトくんに、俺はそう言つてみせる。

それをなぜかと問われれば、まあ助けたんだから最後まで面倒見ようぜつて程度。

無事にたどり着けたかどうかでやきもきするのが嫌だつた、とかそんな感じだ。

「それは……いえ、本当によろしいのですか？」

「よい」

どうやら、アルトくんは俺の同行を許してくれるようだつた。

かつこつけて立ち上がつたのはいいけど、俺の姿つて超絶目立つからね。ありがたけれど、ちょっと……つて言われないか不安だつた。

しかし、そうなるとさすがに土まみれの格好はどうにかしようという気分になつてくる。

こう、ふんっ！ と氣合入れたらどうにかならないだろうか？

「ふんっ！」

「つ!?」

なりました。どうにか。

ちよつと土やほこりや草なんかが飛び散つてアルトくんをビックリさせたものの、エクスデスマイルは新品同様のピカピカに。

そのあと、せつかくなので積み重なつていた動物たちからの『お供え物』を幾つか持つていくことにする。

飲み食いいらずの俺はともかく、アルトくんには必要だからね。運搬にはエクスデスマントを外して風呂敷包みに使用しました。

再生成すればマントはいくらでも増やせるし、意外と便利だなこの能力。

あ。

いかん、忘れるところだつた。使いどころは思いつかないけど、放置は不味い。

「ふつー！」  
「??」

と、言うことでもう一回気合を入れて、『そいつ』を手元に引き寄せる。

土と草を蹴散らし、ビュンと風を切つて俺の手元まで飛んできたのは、ほとんど地面に埋没していた死神の剣。

またも驚かせてしまつたアルトくんにはごめんなさいである。

しかし、これでこんどこそ出発の準備は整つた。

「では、行くとしようか」

「は、はい」

なぜか背筋を伸ばして返事をしたアルトくんに案内を頼みつつ、俺は森の泉をする。

ずっとこの場にいるのも悪くはないと思つていたが、いざ外の世界へ思いをはせればやはり自然と心がおどるものらしい。

今さらながらここが異世界だと確定したことでもあるし、落ち着いたらアルトくんに色々と聞いてみるのもいいだろう。

「ファファアファ……」

「!?」

思わず笑つたら、アルトくんがすごい勢いで振り向いていた。  
すまぬ、すまぬ。

序盤のお助けキャラ程度の働きはするから、許してほしい。  
バラディン（仮）だけに。  
銀の槍はもつてないけどな！

つづくん？

## エクスデス先生 6

草を踏みつけ、低木の枝を切り払い、木立の合間を縫つて森を行く。足元には獣道。

しかしそれも途切れ途切れのつたない線でしかなく、眼前にはどこまでも続く樹木のとばりが下りている。

そんな感じの未開の森からこんにちは、今日も今日とてエクスデス先生をやつてます。

いやしかし、ここ一月ほどを暮らしていた場所は、割りと掛け値なしの未開の地だつた模様。

森歩きに慣れてないとは言え、専業軍人であるアルトくんの足で七日歩いても踏破できないと言う点も森の広大さを感じさせます。

もういつそ、樹海と呼んでも差し支えはないでしょう。

「森の奥地は、迷いの森とか帰らずの森と呼ばれることがあると聞きます」

とはアルトくんの弁。

兎にも角にも木々の数が多く似たような景色が続く上に、熊に狼、時々虎まで出るので、その厄い名称も納得ものです。

まあ、我が魂の故郷……は日本なので、我が肉体の故郷（多分）のムーア大森林に比べたらマシだと思いましょう。

少なくとも、森の木が動いて道を作つたり塞いだりはしないようですし。

「森の精霊、魔物、そういういた噂話は昔からありますか……少なくとも、自分は目にしたこと�이ありません」

アルトくんは、チラリと俺の方へと視線を向けてからそう言う。  
ああ、うん。そうね。この森に不可思議存在はいるか？ つて聞かれたら間違いなく俺＝エクスデス先生だよね。

ここに来てから時間はたつていないので、噂話とは無関係だけど。そもそも、精霊と言うほど清廉じやないし魔物と呼ばれるほど邪悪でも……邪惡、でも……後者は自信ないわ。うん。

エクスデス先生の出自を考えると、ガツチガチの邪惡の化身言われ

ても否定できないです。暗黒魔道師だし。一応。

「ファファアファ」

そんなわけで、笑つて誤魔化しておくことにした。自分でも説明しきれる気がしないのでしかたがないと思いたい。

中の人俺はともかくとして、外の人ことエクスデスボディがどこから来たかも謎ですし。おすし。

アルトくんも、特に追求することなく小さく息をつくだけに留めてくれた。

そして俺たちは、再び言葉少なに南に向かつて森を歩く。

木々や地形が邪魔になれば迂回し、時には下草や低木を払つて前進した。

ここで役立つたのが死神の剣。まさか植物相手に即死発動してくれるとは、このエクスデス先生の目を持つてしても見抜けなかつた。死神の剣で低木ぶつた切つたら、あつという間にシオシオと枯れ果てて後は蹴りでも入れればあっさりと道を作ることが出来た。

らくちん、らくちん。

隣で見てたアルトくんはすごい引きつった顔した後に、一步離れて歩くようになつたけど。

「そろそろ日が暮れます。今日はここで夜営にしましよう」

そうやつて進んでいる内に見つけた少し広めの木々の合間で、アルトくんはそう言つて歩みを止めた。

夜通し森歩きをするんじやないかと思つていたが、どうやら今は無茶をするような場面ではないと判断したらしい。

焦りとか色々とあるだろうに、本当に人が出来ていいなあ。

さて、ここで一つ、森歩きなんてせずにテレポを使えばいいんじやね？と疑問が湧いて出る。

時空魔法テレポ。

大変便利で浪漫溢れる空間移動魔法であり、FF5的にはダンジョンからの脱出手段にあたるものだ。

まさに今の状況にピッタリのこの魔法、しかし俺はとある恐怖から使うことができないでいた。

いしのなかにいる。

ゲームが違うとか言われようと、転移魔法言われるところの可能性が脳裏をよぎるのだ。

それに俺はこの森の奥地から一歩も動いたことがなく、森の入り口にテレポしても何所に出るのか分からぬ。

これで北側の、帝国の制圧下にあるだろう方向に出てしまつたら目も当たられない。

この辺を考えると、世の移動魔法使いたちが一度行つた場所にしか転移したがらない理由が何となく理解できるつてもんだ。

まあもちろん、いつかはダテレポでビュンビュン移動してみたいので、石ころや何かを使つた実験は進めるつもりでいる。

俺、いつか教会の屋根でふんぞり返つてゐる異端審問官の隣にテレポするんだ……。

この世界に居るか分からぬけど、異端審問官。

そんな益体のないことを考えながら行つていた野営の準備も終わり、目の前には焚き木が積み重なつてゐる。

エクスデスマントの風呂敷包みから、今日の食事を取り出しているアルトくんの姿を眺めながら、俺は指先を焚き木に向ける。

そして全力でやるとえらいことになるので慎重に慎重に魔力を調整しつつ、魔法を発動した。

「ファイア」

ボツ、と音を立てて極小の火が焚き木に火をつけて暗くなり始めていた周囲を照らす。

うむ。これだけはお供えの調理のため時たま使つていただけあつて、火力の調整は完璧だ。

「エクスデスマント……今の力は」

そして、ちよつといい気分になつた俺の視線の先では、突如生み出された炎を前に神妙な顔をするアルトくんがいた。

あれつ？

つつく

## エクスデス先生7

アルトくんの神妙な顔にあれつと首をかしげて、ああ、そういえばと自分で納得した私です。

エクスデス先生します。

いやね、意識のあるアルトくんの前で魔法らしい魔法を使つたのは初めてなんだよね。回復の時には気絶してたし。

色々とそれっぽい……死神の剣を念動力ティストな方法で振り回したりとかはしてたけど。

なので、あらためて自分が魔道師であること告げました。『暗黒』部分は聞こえが悪いので言つてないけど。

「あれが、魔法」

そんな何かに納得するような調子で呟かれた言葉を聞くに、どうやら魔法と言う概念自体は存在する様子。

ちょうどよくキャンプ体勢も整つたところなので、この世界における魔法の扱いについて聞いてみることに。

「伝説、言い伝え、あるいは歴史の中に、魔法使いがいたと言う記述は残されています」

そう言つた後、「少なくとも自分は、今の今まで会つたことはありませんでした」と、続けるアルトくん。

なるほど、この世界において魔法は架空の存在か、あるいは遠い昔に失伝して表向きには残つていなってところだろう。

とりあえず、これから出会う人向けに表向きの名乗りとして考へていた『旅の魔法使い』はお蔵入りかな。

「エクスデス殿、魔法は、自分にも使えるものなのでしょうか」

そう言つて、俺の方をじつと見つめるアルトくんの瞳には、力を求める強い決意のような物が宿つていた。

まあね。なんとなくこうなる予感はしてました。

国も仲間も失つて無力感にさいなまれているような状態で、目の前に魔法なんて不思議な力を提示されたら飛びつきますわ。

さて、問われたからには俺も答えなくてはなりませんまい。

「分からぬ」と！

FF5的にはお店で手に入るけど、システム的にはともかく実際に魔法屋で何してるので、システィム的にはともかく実際に

魔法屋で何してるので、魔道書的な何かを購入して

るんじやないかと想像するくらいはできるけどさ。

何より、白黒時空と区分けして使っちゃいるけど、俺が魔法だと言  
い張つてこの力が本当に魔法なのかを証明することもできなかつ  
たり。

ほとんど感覚で使用している力を他の誰かが使えるかなんて、分か  
るもんかという話である。

「そう、ですか」

そう言つてややうつむきがちになり、小さく息を吐くアルトくん。  
だけどまあ……。

「覚えられぬことも無いかもしれん」

「!! 本当ですか？」

おおう、すごい食いつき。ここまで期待させて、やつぱり無理でし  
ただつたら罪悪感が湧くなあ。

ただ一応、成算らしきものがあると言えばあるのだ。

アニマルパラダイスで暮らしているときに色々と試した補助魔法。  
その中には当然のようにライブラの魔法も含まれている。

FFではおなじみ、かけた対象のHPや弱点を表示させる白魔法  
だ。

某関西弁の子にかけて、方向キーを下に入れたことのあるヤツは拳  
手。

(T) ノ

話がそれた。

それで実際にこのライブラを使ってみたところ、出現した俺にしか  
見えていないだろうゲームっぽいウインドウに情報が表示された。

HPなどはゲームと違つて具体的な数字の出ないファジーな表記  
がされていたのだが、幾つかある項目の一つにMPが存在していたの  
だ。

このMP、ほとんどの動物は『無し』と表記される項目だが、稀に『微量』表記の動物がいたりする。

そしてアルトくんは、そんな稀な方の対象に属していた。

なので魔法を覚えようと思えば覚えられる、かもしない。

やつぱり『微量』表記だったので、ラ系とかガ系は難しいかもしけないけど。

ちなみに俺自身にライブラかけたら、MPの表記は『膨大』でした。あらためて、すごいねエクスデスボディ。

え？ いつアルトくんにライブラかけたかって？ ……治療後に目を覚まさなかつたから、不安に駆られてつい。

ゴホン。

さておき、そんな訳でアルトくんには魔法を覚えられる可能性があるかもしれない。

しかし一方で、やつぱり不可能だつて可能性もある（予防線）。

それでもいいなら、俺は魔法の指導を行おうと思うのだがアルトくんはどうだろうか？

「是非」

即答でした。

やる気があつていいんじゃないでしょうか。ええ。

こうなれば俺も、アルトくんが一人前に魔法を使えるように頑張ろうと思う。

騎士 アルト は 暗黒魔道師 エクスデス の 弟子 になつた！

……暗黒魔道師の弟子とか壮絶に聞こえが悪いので、アルトくんのためにも絶対に名乗らないようにしよう。そうしよう。

つついた

## エクスデス先生8

「ファイア」

声とともに魔力がひるがえり、パチリと音がなつて火の粉が舞つた。

本来ならば炎を生み出すはずだつた力は、集中の不足から無為に放出され空気に溶ける。

アルトは、その光景を前にして歯噛みした。  
師が……師となつたエクスデスが、夜営のたびに使う炎の魔法ファイア。

最も力の弱い魔法の一つとして教わつたこの魔法を用いても、今のアルトには種火を生み出すことすらできなかつた。

『焦ることはない』

そう言つて自らをたしなめる師の言葉を、アルトは受け入れられずにいる。

森を抜けるまでもう幾日か、それまでの間にこの力を物にしたいと  
いう心があつたからだつた。

「エクスデス師、自分は不安なのです。森を出れば、いつ帝国兵と戦い  
になるかもしけないとと思うと」

事実、帝国兵は精強だつた。

王国最精銳の誉れ高い近衛騎士団をもつてして互角、王都陥落は  
けつして奇襲と策略の結果だけではない。

高い冶金技術によつて生み出された強固な甲冑と武器の数々、優れた士気と統制された指揮系統。

帝国はおそるべき敵だ。今までは勝てないと、アルトは心を焦らせる。

『どうか』

エクスデスは、アルトの内心を吐露するような言葉を耳にして、一  
言そう言つて黙り込んだ。

甲冑に包まれて顔色は伺えず、感情の色を表すことのない平坦な声  
音。

時折、奇妙な笑い声をあげて喜色を示すことのあるものの、アルトの目に見るエクスデスの姿は概ねそう言つた印象だ。

畏怖。

アルトからの感情に名を付けるのなら、その表現が一番適切だろう。

言葉を交わし、教えを受けてもなお、巨木のようだと初見で抱いた印象は覆されていない。

しばしの無言のあと、エクスデスは地面から木の枝を一本拾い上げアルトに差し出した。

『折つて見せよ』

アルトはそう言つて差し出されたその枝を受け取ると、たいして力を込めるともなく折つて見せた。

乾いた小枝でしかないそれを壊すことは、難しいことではなかつた。

エクスデスは、それを見届けるとまた一本の枝を拾い上げる。

『プロテス』

そうして言葉とともに魔法を発現させると、淡い黄色の輝きを放つようになつた枝をアルトへと手渡した。

「これは……」

軽く力を込めても、枝は折れなかつた。

より強く力を込めれば、あるいは折ることができるものもしなかつたがアルトがそれをする前に、エクスデスが口を開く。

『他者の守りを厚くする白魔法だ。火を灯すことだけが、魔法ではない』

言つてから、エクスデスはさらに続けて様々な魔法の系統が存在するのだと説明をする。

癒しと守りに重きを置く白魔法。  
攻撃に重きを置く黒魔法。

他者を援けあるいは妨害することに重きを置く时空魔法。

様々な魔法がある中で、自分に適した魔法はどれかを見出す必要があるとエクスデスは言つた。

アルトは、手の中で淡く輝く木の枝を見ながら考える。

（自分は、一人で何をしようとしていたのか）

思えば、似たような話は騎士団の先輩からもされたことがあった。

その時に折られたのは、木の枝ではなく弓矢の矢だった。

束ねた矢は折れない。

魔法を使つた分だけ多少おもむきは違つたが、エクスデスの示したかつたのはそれではないかとアルトは思う。

否、違つてもこの際は構わなかつた。

このまま力を求め、その力をもつて何を成すかとアルトは自らの状況を省みる。

皇帝の暗殺でも狙うのならば、今までもいいだろう。

しかし、血塗れで玉座に倒れ伏す顔も知らぬ皇帝の姿を想像して、アルトは「違う」と首を左右に振つた。

（自分は騎士だ。近衛の、騎士だ）

ならば、この身は主君のために。

わずかな間に遠い日のように感じるようになつた騎士叙任式を思い出し、アルトはそつと目を閉じる。

そして、今はただ王女の元へと馳せ参じることだけを考えようと決める。

エクスデスと言う境外の力を持つ者の助力を得れば、それはきっと難しいことではない。

そして、その後は……。

（仲間が必要だ。志を共にする仲間が）

王女がどのような選択をするのか、今のアルトには分からない。

帝国と戦い、王国の再興を目指すのか否かということすらも。

そして、アルトは王女がどのような選択をしたとしてもその意思を尊重して援けようと思っている。

しかし、一人ではきっと何もできない。

ゆえに仲間が必要だと考えた。

数の不利を背負いながら帝国兵の足止めを成しえた理由は、近衛騎士団の団員たちが連携して事に当たつたからだ。

共に王女を支える仲間を見つけなくてはならない。

「感謝しますエクスデス師。自分の目指すべき道が、見えたような気がします」

アルトの言葉に、エクスデスは何も言葉を返さなかつたが、静かに一つうなずいて見せた

それから3日。

アルトたちは、ようやくにも深い森を抜けて平原の開けた風景を目にすることができた。

そして若き騎士は、その日までに自身にとつて一つの契機となつた守りの魔法を身につけることとなる。

つづく

## エクスデス先生9

うつそうとした森の木立を抜けると、そこははるか彼方まで広がる大草原だつた。

そんな訳で、森の中からこんにちは。俺です。エクスデス先生をしています。

隣では、つい昨日から白魔道師をサブに付けたアルトくんが遠い目をして南の方を眺めています。

最初は分かりやすき優先で黒魔法教えたんですけど、どうにも上手く行かないでの白魔法を薦めたところ大当たりしたんだよね。

個人の資質による魔法適性の高い低いが存在しているのかもしない。

黒魔法も一応発動はしているので練習を続ければ上達する可能性はあるけど、アルトくん本人の希望で白魔法一本に絞ることにした。アレもコレもとやつている時間もないでの、この判断は間違つてないだろう。多分。

「ようやく森を抜けました。エクスデス師、この平原を抜ければ目的の地です。それまでよろしくお願ひします」

そう言つてスッと流麗に頭を下げてみせるアルトくんに、俺はうなずいて答える。

俺たちの目的地は南の公爵領で、王国では直轄領の次くらいに榮えているらしい。

領地を治める公爵は、王家の血を引いたいわゆる分家筋で、アルトくんと同僚の騎士たちが守つたお姫様はそこに落ち延びたそな。無事に逃げ延びていればという注釈は付くものの、その辺はたどり着いてみなければ分からぬ。

しつかし……。

「広いな」

「——はい」

ポツリと呟いた俺の声に、アルトくんが返事をする。

目の前に広がる地形はだだつ広い草原地帯で、多少の丘陵めいた起

伏はあるものの思わず笑いがもれそうになるほど見晴らしがいい。人が歩いているだけでももちろん、俺の体格がマツチヨ&ビツグなので壮絶に目立つ。

帝国とやらの哨戒網がここまで届いていた場合、サクッと発見されてもお馬さんで追いかけられる羽目になりそうだ。

それならば夜になつてから移動するのが安全なのだろうけど、ここは便利な魔法の出番。

### 「バニッショ」

魔法名を唱えると、俺とアルトくんの周りに光の粒が集まつてその姿を覆い隠す。

一瞬の後、その場には透明人間と透明エクスデスが一人と一本。お互い目には見えないし地面に影も映つていない。

「事前に聞いてはいましたが、恐ろしい魔法ですね……」

顔は見えずとも聞こえるアルトくんの声に、俺は思わずうなずいてしまう。もちろん、相手には見えていない。

今回使つたのはFF5に登場しない魔法で、白魔法だつたり裏魔法だつたり时空魔法だつたりするバニッショだ。

FF5以外の魔法も使えるのかと聞かれれば、使えちゃつたんだから仕方がない。

アニマルパラダイス時代に、記憶にある補助魔法は一通り試したのだ。

で、アルトくんの言う恐ろしい魔法と言うのは、まあ言わずもがなで悪用しようと思えばいくらでもという話。

足音や足跡までは消せないのでバニッショ単独だと完全ではないが、他にレビテトとか言う魔法があつてな……。

まあもつとも、まだまだこの世界については無知なので、うつかりデジヨンでもかけられてあーれーするリスク考えると怖い。

バニッショデスにはお世話になりました。眠れる獅子的な意味で。「しかし、これならたしかに見つかる心配は無いかと思います。行きましょう」

そんな言葉に続いて、アルトくんが南に向かつて歩き出したのが分

かつたため、俺もその足跡を追うように追従する。

道案内の面では多少不便だが、まあ、一定時間ごとに効果は切れるのでそのたびに修正すればいい。

半日以上も魔法を使いながら移動する際のコストも、俺、もといエクスデス先生のMPならば問題ない。

唯一心配する必要があるのは、アルトくんの体力についてだ、が。

「リジエネ」

何度も目かのバニッショւかけなおしの際に、アルトくんに使用したこの魔法がだいたい解消してくれた。

HP||体力を徐々に回復させる魔法は、駆け足移動を長時間続けるにも大変便利でした。

さらに失った体力はケアルである程度補充可能だったので、リジエネ前にアルトくんが自前でかけた。MPの体力変換といった具合。魔法については俺が使つてもよかつたのだけど、練習になるからえて自分で使うとのこと。

その向上心に脱帽です。先生もとい師匠としても嬉しいね、ファフアフア（小声）

もつとも、本当に脱帽して兜脱いじゃうと悪魔っぽいエクスデスフェイエスがお目見えして「森へお帰り」されかねないので自重。バニッショւしてりやあ見えないだらうけど。

ちなみにMP、からつけつになつても昏倒したりはしない仕様。MPで戦闘不能になるような存在だと、どうなるか分かりませんが。

そうして移動をしている内に、あつという間に2日が経過。

今回は火を点けると目立つので焚き火は無しで、アルトくんは木の実や果物をかじりながらの强行軍でした。

ケアルとかリジエネでゴリ押ししての行動でしたが、コレがそれなりに有効な模様。

ただし俺はともかく人間やつぱり寝ないと調子は崩れる様子。

まあ、俺つたら寝る必要とかないので、夜番しつつ仮眠を取つてもらうことであつさり解決しましたけど。

アルトくんは師に見張りをさせるなんてと恐縮していましたが、これは種族的な差異なので気にする必要は無いと説得しました。

そうして仮眠を取らせたあとに移動を再会して、森を出て3日目の正午過ぎには草原の向こう側に街を囲む城壁と思われる建造物を発見。

人里にたどり着けば、なんとか現在の情勢を確認できると道を急いだわけですが。

「待て」

俺は、そう言つて先を行くアルトくんを引きとめた。ちょうどよくバニッショも解けたので、ちよいちよいと指で示して近くに呼びます。

不思議そうな顔をする彼に、俺は遠くに見え始めていた外壁より少し北寄りを指差します。

人間の視力で見えるかは分かりませんが、そこに俺は”とある物”を確かに確認していたからだ。

つまりは、なんだ。

「戦闘だ」

街のさらに向こう側、遠く続く平原に土煙が上がっているのが見える。

相対するのは、アルトくんのそれによく似た銀色の鎧を見に付けた兵士と、相反するように黒い鎧を見に付けた兵士の姿。

ようやくにも街に着いたと思いつや、どうにも一筋縄とはいかないようだつた。

つづくのかどうなのか

# エクスデス先生10

どうしてこうなつた。

うん。どうも私です。エクスデス先生しています。現在戦場のど真ん中……だつた場所にいます。

「エクスデス師……」

ああ、アルトくんも一緒です。ものすごく呆然としていますが。無限に広がる、つて訳ではないけどだだつ広い大草原。そこにはザワザワとした人の声と虫と蛙の鳴き声が満ち満ちています。

そう虫と蛙の。

かーえーるーのーきーもーちー！ トード！（全体化）

以上、数分前のセリフ b y エクスデスボイス。

状態異常魔法怖いですね。多分効かないけど俺。と言うかエクスデスボディ。

魔法が一般的じやないからか、そんなこと関係なく俺が使ったからかは知りませんが、黒鎧の一団は一瞬で蛙の合唱団になつてしましました。

どうして、もとい、そうしてこうなつた。

ミニマムの方がよかつただろうか。いや、そうじやない。

アルトくんの母国である王国の要衝に攻めかかる黒鎧の帝国軍！ それを見て逸るアルトくん！ どうしよう俺！

メテオとかフレアとか、全體化ファイガとか使うと大惨事待つたなと思われる所以、そうだそれなら状態異常にしやれ、トードでいいや。

しかしてその結果がこれである。

状態異常魔法怖いね（二回目）

微妙に黒っぽいカエル軍団は、ピヨコピヨコミピヨコピヨコと帝國領に向かつて移動する素振りを見せてますが、しょせんはカエル、遅いです。

いやまあ、通常のカエルならすばしっこいかもしませんが、いま

さつきカエルになつた大型犬サイズのにわか両生類なら仕方がない。中には勇敢に王国兵に突つ込んでいくカエルくんもいますが……。

鉄の鎧に弾力溢れたカエルボディの体当たりじゃあなあ……。

何匹かは反撃を受けてひっくり返り、ピクピクしています。南無。さて、このまま傍観しても、いずれは收拾が付くかもしませんが、カエルさんたちに対して忍びないのでアルトくんに声をかけませず。

どうする？

判断ぶん投げたとも言うけどな！

「あ、はい、ええと、とりあえず指揮官を捕まえましょう。位置関係でだいたい分かります。それから元の姿に戻して……戻せますよね？」そんな俺の無茶振りに答えて、アルトくんは超冷静に今後の対応を示してくれます。最後だけちょっと不安そうだったのは気にしない。表情その他もうもうから、深く考えたら負けだと考えているのが手に取るように分かるけど、気にしないつたら気にしない！

エスナでももう一回トードでも、どうとでもなるのだから。

でもそうか、この世界？ だと乙女のキツスとか市販されてないから、蛙と小人と石化の回復は俺がやるか誰かが魔法覚えるしかないのか。

……三回目だけど、状態異常魔法怖いね。マジで。

「ババババ、御助勢に感謝いたしますぞおつ！」

で、旗に囲まれた辺りにいて、複数の蛙に囲まれてた偉そうな蛙を連れて会いに行つた王国側の責任者さんのセリフがこれである。

無茶ビビつてているこの辺を治める王国最大の実力者にして、遠く王家の血を引く公爵であらせられる将軍閣下。推定40代ナイスミドル。

大丈夫よー、エクスデスだけど怖くないよー、いきなり斬りかかるれたけど無傷だから特に問題ないよー。

ちよつと反射的に反撃しちゃつて酷いことになつたけど、レイズし

たら生きてたから大丈夫大丈夫。

ゴメン嘘ついた。超怖いよね。俺。

なお、推測するにエクスデス先生を打ち倒すには、超高レベルの光の戦士が聖剣持った上で6回から7回斬りつける必要があると思われます。

単発攻撃ならメガフレアにだつて耐えてみせらあ。でもみだれうちと連続魔、限界突破は勘弁な！ ファツファツファ！ むしろ光の戦士が怖い。

つづいたらどうしよう